

ハイディ

(第二十三回)

津田芳雄譯

二十一、おちいさんの家で

お日様は山の上ののぼりはじめた所で、一日の最初の金いろの光りを小屋や谷間にふりそそいでゐた。おちいさんはいつもの通り、朝のひきまきを、静かな恭々しい氣持で小屋の前に立つて、朝霧が次第に霽れて、峯や谷がほのぼの姿をあらはし、又一日が明けて行くのを見成つてゐた。

見る見る頭の上のうすい朝雲が明らかに來たと思ふと、お日様がその雲を破つてキラキラと輝き出し、岩も森も山々も、一面にその金いろの光りを浴びた。

おちいさんは小屋に戻り、靜かに梯子をのぼつて見た。クララが今日を覺まし、丸窓から射し込

んでお床の上を跳ねまはつてゐるまはゆい日の光りを、びつくりして眺めてゐるまはゆいだつた。はじめは自分か何を見てゐるのか、何處にゐるのか、ちよつと見當がつかなかつた。やがてそばに眠つてゐるハイディが目に入り、今は又、よく眠れたが、疲れはよく休まつたか訊ねてくれるおちいさんの元氣な聲が耳に入つて來た。クララは疲れなんかすつかり直つて、朝まで一と寝入りだつた。さ答へるに、おちいさんは満足して、早速細々ミ氣を配りながら、やさしく世話を焼きはじめた。まるで今まですつと、病氣の子供の世話ばかり本職にして來た人のやうに行き届いてゐた。

ハイディも目を覺まし、クララがもう著換へを

すましておぢいさんに抱かれて下へ降りようさしてゐるのを見て、びつくりした。跳び起きて、稻妻のやうな早さで支度をし、梯子を駈け降りて外へ出て見るさ、ここにも又びつくりするさかきが待ちかまへてゐた。おぢいさんは昨夜二人が寢てしまつてから、大仕事をしたのだつた。クララの寢椅子が小屋の入口の戸につつかへて這入れなかつたので、小屋の横の板を二枚はづして、自由に這入り出来るやうにし、又いつでも付けはづしの利くやうに、その板はゆるくしておいたのである。かうして今、クララを寢椅子で小屋の前に連れ出し、日向ぼつこをさせておいて、自分は山羊の世話をしに行つた。ハイデイは急いでクララの傍へ駈けて行つた。

さわやかな朝風が子供達の頬をなぶり、一吹き毎に、かぐはしい椋の葉つばのほひを運んで來た。クララはうれしさうにそれを胸一ぱいに吸ひ込んで、これまでにないせいせいした氣持で寢椅子によりかかつてゐた。こんなひろびろとした田舎で、こんなに朝早く、こんなにひいやりま心地よい澄んだ山の朝風に吹かれたのは、生まれて初めてなので、吸ふ一息一息が、うれしくつてたま

らないのだつた。輝かしい日の光りは、山の上では、暑すぎず蒸しすぎず、手や草の上に、ほんのりさ暖くだだよつてゐた。山の上がこれほごまでに楽しいさころださは、クララは思ひもかけなかつた。

「ねえハイデイちゃん、ほんさいつまでも、ここであんたさ一緒にゐられるのだつたら、いいわねえ」

クララはうれしさうに叫び、寢椅子の中であちこちさ向きを變へては、なほも日の光りや山の氣を吸ひ込むのだつた。

「ね、わたしの云つたさほりでせう？おぢいさんさ、このお山で暮らすのが、世界中で一等美しいでせう？」

ハイデイもうれしさうに答へた。

丁度この時、おぢいさんが山羊小舎から雪の様に眞白な泡立つお乳の這入つた二つの小さなお椀を持つて來た——一つはクララに、一つはハイデイにさ。

「これを飲まれるさ、お嬢さんもぐんさ丈夫になられますぞ。『小さい白鳥』の乳です。さあ、お嬢さんが丈夫になられるやうに！ひさつ、飲んでご

らんなされ」

クララは今までに山羊のお乳は飲んだことがないので、ちよつこもぢもぢして、口をつける前にほひをかいて見たりしてゐるが、ハイディか如何にもおいしさうに、息もつかずに飲み干すのを見て、すぐ眞似を試みるこ、まるでお砂糖と肉桂が這入つてゐるのかと思はれるくらゐおいしくて、一滴も残さずに飲んでしまつた。

「あしたは一杯にしませうかな」

おぢいさんはそれを見て、満足さうに云つた。そこへペーテルが山羊をつれてやつて来た。ハイディがいつものやうに山羊たちに取りかこまれてゐる間に、おぢいさんはペーテルに話があるこ云つて少しわきへ呼んだ。山幸たちが喜んではいしやまはるので、そばではやかましくて、話が聞えないのである。

「いいかね、今日からは、『小さい白鳥』は好きなところへ行かせてやつてくれ。あいつは不思議に、生まれながらにして、よい食べ物のある所を嗅ぎ分ける力を持つてゐる。少々高いところに登つて行つても、ついて行つてやつてくれ。決して引き戻すではないぞ。ほかの山羊きもがついて行つて

も、大丈夫ぢや。あいつはお前などより、よく心得て居るからな。實は、出来るだけ上等の乳がほしいのぢや。——なんぢや、そんな嘴み付きさうな顔をせんでもよい。誰もお前の邪魔はしはせん。さあ、わしの云つたことを忘れぬやうにして、早く行つておいで」

ペーテルはおぢいさんの吩咐けには、いつも即座に従ふこゝになつてゐるので、早速山羊たちを連れて出掛けたが、内心不服のしるしに、ぐいこ首をまはして、眼をぎよるぎよるむいて見せた。山羊たちに押されてついて来たハイディを見るこ、急にうれしさうに呼びかけた。

「けふは一緒に来ておくれよ。僕は『小さい白鳥』について行かなくちやならないんだから」

「駄目なのよ」

ハイディは山羊たちに取りまかれながら、呼びかへした。

「これからも、すうつこ行かれないのよ——クララの泊つてゐる間ぢうすうつこ。でも、おぢいさんが、いつか二人きも連れてつてやるつて仰しやつたわ」

ハイディはやつこ山羊の圍みを逃げ出してクラ

ラのミところへ走つて歸つた。ペーテルは両手の拳骨を固め、寝椅子にねてる病人に向つて、にくらしさうに振りまはした。それから急に、おぢいさんが見てるはしなかつたかミこわくなり、そんなこゝに心を使ふのがいやさに、下から見えないミところまで、息もつかずに一散に駆けのぼつた。

クララミハイディは、あんまりいろんな計畫を立てたので、何處から手を付けていいかわからない位だつた。ハイディは、まづ第一に、お約束だからおばあさまにお手紙を書かうミ云つた。おばあさまは、クララを山の上にあづけて自分はラガツ温泉にゐても、まだほんたうに山の空気がクララの體に合ふかさうかが氣懸りだつたので、何か事があればすぐにも出かけられるやうに、毎日お手紙をよくすこゝを子供達に約束させたのである。

「ぢや、おうちへ這入つて書くの?」

クララはお手紙には賛成だけれども、あんまり外が氣持がいいので、こゝを動くのがいやだつた。ハイディはすぐに走つて行つて、學校の本だの、書きもの道具だの、自分の小さな腰掛けだのを持ち出して來て、讀本ミ練習帳をクララの膝の上に

おいて、書きもの臺を作つてやり、自分は腰掛にかけてベンチを机にし、かうして二人はおばあさまにお手紙を書きはじめた。けれどもクララは、一區切り書く毎にペンをおいて、あたりを眺めまはした。あんまり景色がよくて、お手紙なご長々ミ書いてゐられないのである。風はおさまり、今ではかすかに頬を撫で、輕やかに樅の枝を鳴らしてゐるだけだつた。小さな羽蟲がまはりの澄んだ究氣の中を低くうなりながら飛びまはり、遠くの日溜りの廣い牧場は、ひつそりミ靜まり返つてゐた。はるか頭上高くには黙々として峯々が聳え、目の下一面には、廣々とした谷間がやすらかに横たはつてゐた。物音さへいへば、ほんの時たま牧童の呼び聲がかすかにひびいて來るばかりで、それが又やはらかく岩にこだまするのだつた。子供達は無心に書きつづけ、いつおひるになつたかも知らなかつたが、やがておぢいさんが、湯氣の立つお乳を持つて來てくれた。お嬢さんは陽のある間は少しでも外にゐなざる方がよいさういふ、おぢいさんの意見だつたので、かうして昨日の通り、おひるは外でいただいた。それがすむミ、ハイディはクララを樅の木の下に押しして行つた。その木蔭

で、お互ひにお別れ以來のお話をし合はうさいふのである。ゼーゼマン家では、だいたいこしては、べつに變つたごもなかつたけれども、ハイディにはその一人一人がお馴染みなので、細かいここになるご、話はいくらでも盡きないのだつた。

お話に實が入つて子供達の聲が高くなれば、それに仲間入りするやうに、頭の上の小鳥たちは一層囀り立てるのだつた。子供達はますますうれしがり、時の經つのも忘れてゐるご、ペーテルが歸つて來たので、夕方が突然やつて來たやうな氣がした。ペーテルはまだふくれてゐて、一緒に仲間に入つてお話なさして行きさうな様子もないので、ハイディは

「さようなら、ペーテル」

ご聲をかけるご、クララも親しげに

「ペーテルちゃん、さようなら」

ご呼びかけたけれど、ペーテルは知らん顔をして、むつつりご山羊たちを追ひ立てて歸つて行つた。

クララは、おぢいさんが『小さい白鳥』のお乳をしぼりに向ふへ連れて行くのを見るご、早くあの香ばしいお乳が飲みたくなつて、待ち遠しさうに

云つた。

「へんねえ、ハイディ」クララは自分でもびつくりしてゐた。「あたし、ずうつご思ひ出して見ても、今まで何か食べたのは、食べなきやならないからで、何を食べても、肝油みたいな味がして、何にも食べたなり飲んだりしなくてもいいのだつたら、ごんなにいいかしらご、いつも思つたわ。それがさうでせう、今ぢや、おぢいさんが早くお乳を持つて來て下さればいいのにご、待ち遠しがつてるのよ」

「ええ、わたしわかるわ」

ハイディは自分がフランクフルトで、幾日も何を食べてものごにつまりさうだつたごを思ひ出して答へた。だがクララには、さうしてもそのわけがわからなかつた。實は不思議でもなんでもなく、いままではクララは一度だつてごんなにいちんぢう外で、ましてごんな氣分のせいぜいする高い山の上で、暮らしたごがないからなのであるが、おぢいさんがやつご待ちに待つた夕ごはんのお乳を持つて來てくれるご、クララは一ご息に飲んでしまひ、ハイディよりも早く「お代り」ご云つてお椀を差し出した。おぢいさんは二人のお椀

を持つて中に入り、今度なみなみさ注いで持つて出て来た時には、おまけの御馳走を持つてゐた。今日、村の羊飼ひの家へ行つた時、丁度おいしさうなバタが出来てゐて、大きな塊り一つ買つて来たので、早速それを厚くパンにつけてやつたのである。クララミハイディが如何にも子供らしくお腹を空かしておいしさうに食べるのを、うれしさうにちつミ立つて見成つてゐた。

その夜クララはお床に這入つてから、お星様を眺めようとしたが、ぢきに眼がふさがつて来て、ハイディと殆ど一緒に眠つてしまひ、朝までぐつぐつと寝入つた。こんなこゝは全く今までにないことだつた。

このやうにして、その次ぎの日も次ぎの日も、楽しく過ぎて行つたが、三日目に、子供達のびつくりするものが届いた。二人の頑丈な人夫が、一つづつ寢臺をかつぎ、澤山の敷蒲團と、二枚の眞白い掛蒲團を持つて、山をのぼつて来たのである。それにはおばあさまからのお手紙が添へてあつた。これはクララミハイディにあげます。ハイディはこれからずつとほんもののベッドに寝られるやう、冬デルフリの村のおうちへ行く時にも、一

つだけ山の小屋にのこしておいて、もう一つのは持つていらつしやい。さうすればクララが又山へお邪魔しても、泊めていただけでせう。いつも長いお手紙をありがたう。これからもつづけて毎日書いて下さい。わたしはそれを見て、二人の様子を思ひ描いてゐます。ミ書いてあつた。

おぢいさんは屋根部屋へのぼつて行つて、うづ高い枯草を取りのけ、人夫を助けて二つの寢臺をかつぎ込んだ。子供達がお日様やお星様の光りをごんごんに楽しみにしてゐるかをよく知つてゐるので、やはり丸窓から外が見えるやうに、二つの寢臺はくつつけて竝べた。

ラガツ温泉に滞在中のおばあさまは、毎日山の子供達から元氣なおたよりが届くので、大よろこびだつた。クララは日が経てば経つほど一日一日が面白くてたまらなく、おぢいさんの親切な心づくしや、フランクフルトにゐた時よりも、もつともつと愉快な子になつてゐるハイディの、元氣な面白のおもてなしには、お禮の云ひやうもなく、毎朝目が覺めてまづ思ふことはいへば、「ああ、まだここにゐたんだわ。まあうれしうございませう。まだ書いてゐた。毎日このやうな安心なおたよりが

づくので、おばあさまは、この分ではなにも険しい山道を馬に乗つてのぼつて行かなくても大丈夫さ思ひ、子供達のまごころに行くのは、少し延ばさうと思つた。

おぢいさんはこの小さな病人をこまさらいぢらしく思ふらしく、毎日何かしら一つづつ、病人をよくする工夫をこらしてゐた。この頃では、毎日おひるから山へのぼつて、奥へ奥へ分け入つては、よいにほひのする葉つばをさつさり取つて來た。それはカーネーションさかじやすう草さのまじつたやうな、いい香りで、遠くまでよく匂つた。それを山羊小舎に吊るしておくさ、山羊たちが歸つて來てにほひを嗅ぎ當て、夢中になつて飛びつかうさするのだが、おぢいさんがわざわざ山奥深く分け入つてこの得難い葉を取つて來たのは、むざむざさきの山羊にでも食べさせる爲めではなく、特別上等のお乳を出してもらふために、『小さい白鳥』ひさりに食べさせようが爲だつたのである。効果靨面、『白鳥』はめきめき眼の光りからして違つて來て、ますます愉しげに頭を打ち振るやうになつた。

クララが山に來て、もう三週間になつた。この

四五日來、おぢいさんは毎朝抱き起して下へつれて來るさ、

「さうですか、お嬢さん、ちよつこでも立てるか、ためして見ませんか」

さ云ひ云ひした。クララはおぢいさんの心づかひに對して、ただおぢいさんを悦ばせようとして立つて見るのだつたが、足が地についたかと思ふさ、もう痛いさ云つておぢいさんにしがみ付かねばならなかつた。それでもおぢいさんは毎日少しづつ長く立たせて見るのだつた。

この夏は、山は近年にないお天氣つづきで、毎日空には一點の雲もなく、お日様は美しく照り輝いた。花はいい匂ひをみなぎらせて咲き亂れ、さちらを向いても、華やかな色で眼を樂しませてくれた。夕方になれば、夕映えが峯々や大雪原を眞赤に染め、そして一等おしまひに、お日様が金いろの焔の中に沈む。ハイディは高い所へ行かなければ見られないこの美しいさまさまの色のお話を、幾度クララにしてあげても、決して飽きなかつた。ある夕方、木の下に坐つて、金いろに光る半日草がかたまつて咲いてゐる横には、葉つばまで青く見えるほぎの青い風鈴草がさつさり咲き

みだれ、いいにほひのするまび色の花が一叢一面に匂つてゐる山の斜面のこまや、夕陽の神々しい光りのこまを夢中になつて話してゐるま、ハイディはそれがもう一度見たくつて矢も楯もたまらなくなり、いきなり物置きにゐるおぢいさんのまころへ駆け出して行つて、這入る間もまかしく叫び立てた。

「おぢいさん、あした山羊ま一緒に、お山へ連れてつて頂戴よう。今お山の上は、まつてもきれいでしょ？」

「よしよし。その代り、わしからも、お嬢さんに一つ註文があるぞ。お嬢さんに、今晚もう一ぺん、立つけいこをしてもらひたいのぢや」

ハイディはこのよいしらせを持つてクララのまころへ駆けまぎつた。クララは明日の山のぼりがこの上もなく楽しみだつたので、すぐにおぢいさんのいふまほり、一生懸命に立つけいこをして見る約束をした。ハイディはうれしくつてたまらず、ペーテルを見付けるま、はしやいで呼びかけた。

「ペーテル、ペーテル、わたしたちね、あしたみんなで、あんたま一緒にお山へ行つて、いちんちぢう遊ぶのよ」

ペーテルは小熊のやうにふくれ上り、何かぶつぶつ返事をするま、罪もない「ひわ」をひつづばかりかうこ鞭をふり上げた。「ひわ」はびつくりして、それを見るや、大いそぎで「ゆき」を飛び越して逃げて行つたので、鞭はむなしく空を打つただけだつた。

その夜、クララまハイディは、明日の楽しみで胸をふくらませながら、立派なお寢床に入つた。明日の相談が山ほまあるので、今夜は夜つびて眠らないでお話しようま約束したのだけれど、二人まも、ふわふわま氣持のよい枕に頭をくつつけたかま思ふま、ぢきに話聲がまだえ、クララはいちめんに釣鐘の形をした青い花が咲きみだれて、まるで空のやうな色をした廣い野原の夢を、ハイディは高い空から「おいで、おいで、おいで」ま呼んでゐる大きな鳥の夢を見た。